図書館だより　12月号

令和５年12月６日発行　　川島中学校・高等学校図書館

クラス読書会（11月16日実施）の感想をご紹介します！Part1　（抜粋しています。）

＊　走れメロス　　太宰治／著

セリヌンティウスの友を信じぬく心と、メロスの走りきる強さがとても素敵だなと思った。中学生の時にも読んだことがあるけれど、その時とはまた違う感情が生まれた。もし、私がメロスの立場になったら、一度見た悪夢にそのままのまれて立ち直る勇気はない。でも、メロスは信じてくれている人のために立ち直って最後まで走った。私も、メロスのように信じてくれる人がいるから何事も頑張れる、そういう人になりたいと思った。

心に響いた（残った）一文　「信じられているから走るのだ。」　（44ＨＲ女子）

メロスとセリヌンティウスの友情の強さとお互いを信じ合う心を知った。メロスの言葉の一つ一つには、絶対に友を失わないという決意と、どれほどのピンチに直面してもあきらめない行動力の高さが感じられた。自分のことを“真の勇者”だと鼓舞していたメロスだが、ディオニスの「信実とは空虚な妄想」だという考えを真っ向から打ち砕いたので、読者からも「メロスは“勇者”だった」と思わせるとても素晴らしい作品だと思った。

心に響いた（残った）一文　「信じられているから走るのだ。まにあう、まにあわぬは問題ではないのだ。」（44ＨＲ男子）

＊　カナダ・エスキモー　　本多勝一／著

一番心に残っているのは、エスキモーの食事についてだ。少女がトナカイの頭をほじくって脳みそを食べているところや、骨髄（こつずい）を出して食べているところが、私たちの生活ではあり得ないようなものばかりで衝撃を受けた。ソリ犬を甘やかしてはいけないという話では、日本のように犬をかわいがるのではなく、ただただ狩りの道具として使っていることに私たちとは全く違う価値観を持っているのだなと感じた。本多さんがエスキモーたちとの生活を通して私たちに伝えたかったことは、「生きる」ということの重さだと思った。

心に響いた（残った）一文　「中天にあわく光る半月を見て、夜とはいいものだと思った。」　（52ＨＲ女子）

部屋の中に便器にしている空きカンが置いてあったり、片隅に動物の死骸（しがい）がかさなっているということに驚いた。大人は手ではなをかんで、赤ちゃんは咳（せき）をするたびにもどしているという状況にも驚いた。こんなに衛生管理の悪いところで生活をしているなんて私には絶対に無理だと思った。他にも、犬のしつけがとても厳しくムチやカナヅチで殴（なぐ）ると書かれていて、虐待（ぎゃくたい）のように感じられた。しかし、このしつけ方で一般の家庭で飼われている犬よりも忠実な犬になるという事実にも驚いた。苛酷（かこく）な環境の中で生活しているカナダ・エスキモーは、私の日常生活と全く異なる生活をしていてすごいと思った。

心に響いた（残った）一文　「『食事』とは、いったい何だろう。」　（52ＨＲ女子）

＊　沈黙　　村上春樹／著

私が面白いと思ったのは、大沢が怖いと思うのは青木ではないこと、「沈黙」という言葉、最悪な人間関係にからんでくるボクシングという競技だ。大沢を陥（おとしい）れようとした張本人は青木だが、それより怖いのは、青木のような人間の話を無遠慮に信じ、自分で何かを考えようとせず、何の責任も持とうとしない連中だとも言っている。こういう人たちは青木の悪事がばれたときも同じように青木に対して沈黙という凶器をふりかざすのだろうと思う。ボクシングを通して得た人間関係、大沢の志あるまなざしに、青木は動けなくなったのだと思う。スティーブ・ジョブズの格言「人生は限られているのだから、他人の人生に時間を費やしてはいけない。自分の心と直感を信じる勇気を持ちなさい」をよく表した話だった。

心に響いた（残った）一文　「人生そのものに負けるわけにはいかないと思ったんです。」　（61ＨＲ女子）

最後に大沢が「本当に怖いと思うのは、青木のような人間の話を無批判に受け入れて、そのまま信じてしまう連中です。」という言葉にハッとした。想像してみると、一人から向けられる嫌悪（けんお）や悪意よりも、大衆から向けられる疑惑や嫌悪の目の方が何倍もつらく、怖いなと思い、それに耐えた大沢は我慢強いのも納得だった。優しい人は、つらかったり苦しかったりした経験があって、人に親切にできるのだなと思った。他人の噂（うわさ）話を信じたり、聞いたりせずに、その人一人一人ときちんと向きあうことが大切だと改めて思った。

心に響いた（残った）一文「どれだけ他人の目を引こうと、表面で勝ち誇ろうと、そこには何もありません。」（６１ＨＲ女子）

＊　凧（たこ）になったお母さん　　野坂昭如／著

お母さんはカッちゃんを死なせないように水を探したが、周りは火だらけだからどうすることもできず、自分自身の体から出る水分でカッちゃんの体を守っていて胸が苦しくなった。自分の子どもがまるこげになって、死なないように力を尽くす姿は、自分がどうなっても子どもだけは生き抜いてほしいという強い気持ちが伝わってきた。また、死ぬくらいなら寝ている間に、夢を見ている間に、痛い思いをしてほしくないという親心が伝わってきた。戦争は、たくさんの命も、形も消し去る、みにくいものだと改めて実感した。

心に響いた（残った）一文　「いつも空の上でお母さんが見てくれるように思えました。」　（64ＨＲ女子）

改めて戦争の恐ろしさに気づいたし、命のはかなさや尊さ、誰かを必死に守ろうとする人の心、たくさんの思いを感じ取ることができた。お母さんとカッちゃんの親子の愛は、最後まで深いものがあった。私がこのような状況ならば、マイナスなことしか考えずあきらめてしまう。この本は、勇気や最後まであきらめてはいけないことも強く教えてくれた。最後にお母さんは、体から水分が全てなくなり、強風で“凧”のように飛ばされ空に舞い上がり、カッちゃんもお母さんと同じように“凧”のように空へ飛び、最後まで一緒にいる愛を感じた。

心に響いた（残った）一文　「どうしても死ぬための子守唄を私に与えてください。」　（64ＨＲ女子）

＊　マジック・アワー　　関口　尚／著

本を読んでみて思ったことは、努力は必ず誰かが見てくれているんだということだ。たとえ理解者が少なかったとしても、誰か一人でも、見てわかってくれる人がいるだけで心は楽になる。そのような人を社会に出ても見つけられるようにしたいと強く感じた。

もう一つ考えたことは、強さの裏には努力があるということだ。これは、陸上だけの話ではなく、他にも通ずることなのではないかと思う。誰に見られていようといまいと、努力したぶん、自分に実力という形で帰ってくる。主人公が快く走り出せて本当に良かったと思った。

心に響いた（残った）一文　「走り去るふたりをじっと見送った。」　（63ＨＲ女子）

何もしないで良い結果を得ている人は数少ないと思った。多くの人が良い結果を残したり、得たりするために、必ずどこかで努力をしているのだと感じた。見えないところでしている努力が報（むく）われることはとてもうれしいと思う。自分も、何事にも努力できるような人になりたいと思った。また、好き同士なのに結ばれなかったところがせつなく感じたと同時に、この本のタイトルと重なるところがあって良いなと思った。恋においても勝負ごとにおいても、報われる人がいれば、その一方で報われない人もいて、不公平だと思うこともあるが、だからといって相手を責めたりせず、自分が努力できるような人でありたいと思った。

心に響いた（残った）一文　「せつなくなるような空が見られる時間帯（マジック・アワー）」　（63ＨＲ女子）

この他の感想は，次号でご紹介します！

読書週間雑誌付録プレゼント実施報告！

10月24日から11月27日まで実施した“読書週間雑誌付録プレゼント”にたくさんのご応募ありがとうございました！期間中の本の貸出冊数は295冊、参加人数は延べ194人でした。図書委員による厳正な抽選の結果、当選者には担任の先生を通じて連絡しました。15日までに図書館に景品を取りに来てくださいね。

10月・11月の図書館利用状況について

高校生の授業での図書館利用と、読書週間にあわせたイベントもあり、図書館の利用が増えました。2か月間の図書館利用者数は1510人、本の貸出冊数は825冊でした！貸出冊数１位は 51HR 170冊！！

12月は、県立図書館から借りた、クリスマスの本としかけ絵本（ポップアップ絵本）の展示をしています。どうぞごらんください。

12月は27日まで開館します。
１月は9日（始業式の日）からです。